

ポール・ニザン論

— その個人的理由 —

佐々木 涇

序

「ぼくは20歳だった。それが人生で最も美しい時代とは誰にも言わせない。」⁽¹⁾

高等師範学校時代、J.-P. サルトル Jean-Paul Sartre(1905—)と学生寮の同室に住んでいたポール・ニザン Paul Nizan (1905—1940)⁽²⁾が、作品アデン・アラビア Aden-Arabie⁽³⁾の冒頭で書き出したことばである。このように大見栄をきった若者は、おそらく敏感で、また感受性豊かであったことだろう。苦悩するその姿はサルトル自身にも不可解であったに違いない。サルトルは証言する。

「ニザンが、はたちの時破れかぶれの性急さで、女や自動車、この世の全ての富を眺めていた。」⁽⁴⁾

「彼は何日も、私に話しもしないことがあった。二年目はさらに陰気になった。出口を予期せず、ある危機を経ている。そして姿を消した。三日ほど後に、見知らぬ人達と共に泥酔した彼が見つかるのだった。」⁽⁵⁾

苦悩する若者は、それから14年後、1939年9月17日ソ連の赤軍によるポーランド侵入後、フランス共産党を脱党する。その間、種々の事件や事実があったとは言え、この若者の苦悩の要因となるものが持続していたと言えるだろう。

註1. Paul Nizan <Aden-Arabie>, Maspero, 1967, p.55 以下A.—Aと略す。

2. ニザンは1905年2月7日 Tours で生れる。父はピエール・ニザン Pierre Nizan 鉄道技師。1940年5月23日ダンケルクから退却中、ナチス・ドイツ軍の弾丸にあたり絶命した。

1916年アンリ四世高等中学校の第五学級へ転入した時、サルトルと知り合い、1922年ルイ大王高

等中学校へサルトルと共に、受験準備学級 Khâgne に移る。1924年に高等師範学校の試験に合格し、サルトルとの交友関係は続く。

3. 1932年 Rieder 社から出版された。戦後1960年、サルトルの序文付きで、Maspero 社から再出版された。同社からの再出版に Les Chiens de Garde (1960), Les Matérialistes de l'Antiquité (1965), 解説書に Paul Nizan intellectuel communiste. (1967) がある。

4. J.-P. Sartre <Les Mots> Gallimard, 1964, P.164

5. J.-P. Sartre <Avant-Propos> dans Aden-Arabie, P.18

I

1939年8月23日、独ソ不可侵条約が締結された。ソビエト科学アカデミー編集の「世界史」⁽¹⁾では次のように記している。いくらか弁解気味に。

「8月の後半、イギリスとフランスがモスクワ交渉をサボタージュし、ハルビンとゴール河のほとりの軍事行動がほんものの戦争になってしまいそうな恐れが見えた時、ソ連邦は西と東との双方から攻撃されるという現実の危険に直面した。……ヒトラー・ドイツの支配層はソ連邦と協定を結べば、両面戦争をさけることができるということを理解していたので、はやくも1935年5月から先のような協定に対するソビエト政府の態度を知ろうといくどか試みてきた。…ソ連邦としては、自分の立場を変えざるを得なくなった。それで、ドイツが新ためてソ連邦に話を持ちかけた時、ソ連邦はソ独不可侵条約の締結に同意したのである。1939年8月23日、この条約は調印された。」

ファシストと коммуニストが握手したのであ

る。全世界を驚嘆させた。フランスも例外ではなく、ルイ・アラゴン Louis Aragon (1897—) ⁽²⁾は小説「共産主義者 Les Communistes (1948~1951)」の中で描写している。

「ニュースは、人々のその居る場所に達した。パリでは夕刊が出た頃⁽³⁾、大部分の人は仕事だった。その他の者は、ロビションたちのように昼食時に家でラジオから聴いた仲間から、そのニュースを受け取めた。人々はそれを信じなかった。わめき声が始まった。遠くの小さな町や田舎では、それが理解されるにはもっと時間がかかった。そのために種々の解説の雲が、不明瞭にした後で、問題を明らかにした。」⁽⁴⁾

そして、シモーヌ・ド・ボエヴォワール (Simone de Beauvoir (1908—)) も「女ざかり La Force de l'Age (1960)」で記述する。

「ある朝、私たちは⁽⁵⁾、独ソ条約の締結を新聞で知った。何というショック!……ニザンはコルシカに居た。私たちが話しをしたかったのはとりわけニザンだった。……どんなふうに彼は反応していたらうか。」⁽⁶⁾

8月25日、モーリス・トレーズ (Maurice Thorez (1900—1964)) ⁽⁷⁾はフランス共産党の公式声明を発表する。

「……その平和政策に忠実なソヴェト連邦は、反コミンテルン協定⁽⁸⁾を基礎として結ばれた侵略者の解体政策に乗り出した⁽⁹⁾。独ソ条約は今朝のプチ・パリジャン紙が顕著にしたように、日本人やスペイン人、ハンガリー人を仰天、昏迷させた。かくして、ソ連邦はミュンヘン・プランに王手詰みをかけた。」⁽¹⁰⁾

9月1日、ドイツ軍はポーランドに侵入を開始した。

9月2日、ニザンは召集され、アルザス地方に配属される。

9月3日、英仏はドイツに宣戦布告する。

9月17日、ソ連の赤軍のポーランド侵攻、ドイツと共に分割統治をする。赤軍のポーランド侵攻以前、フランス共産党はポーランド政府を支持し、ヒットラーを侵略者と規定していた。それ以後は、ファシストに対する闘いではなく、帝国主義国家間の闘いと規定した。つまりポーランドは

反動国家であり、赤軍の侵攻、ポーランドの分割

統治を支持することになった。

「二・三の政治的決心をした。ポーランドの件は簡単に受け入れられない。汎スラヴ主義は鼻もちならぬ」⁽¹¹⁾とするニザン。

9月26日、ダラディエ内閣は、フランス共産党に解散命令を出す。⁽¹²⁾そしてニザンの批判。

「クレムリン協定⁽¹³⁾の全文を読んだ。ヨシオ・ヴィサリオノヴィッチ⁽¹⁴⁾の賭けが解るような気がする。少くとも言えることはそいつが二重になっていて、赤い糸で縫いつけられていることさ。」⁽¹⁵⁾

「ニザンはデュクロ⁽¹⁶⁾に非常にそっけない脱党の手紙を送った。」⁽¹⁷⁾

「ぼくがあの立場をとったのはベルリンとの協定をソ連側が悪いと信じたからではない。必要な政治的厚顔無恥と嘘をつく政治的力量が欠けていたと思ったのが、ちょうどその理由なんだ。フランスの共産主義者達には、そのようなことが、危険な外交交渉から最大の利益を引き出すために必要だったのだ。」⁽¹⁸⁾

ニザン自身はすでに、独ソ不可侵条約の内容を、つまり「スターリンの賭け」を読みとっていたのである。さらに「汎スラヴ主義は鼻もちならぬ」とした時、ニザン自身の中に感覚的な嫌悪感が生じていたと言えよう。さらにフランス共産党の顔が常にモスクワの方を向いていたことに対する反感もあったらう。ニザンの個人的理由のために、共産主義に対する失望もすでに存在していた。1934年のモスクワ滞在以来のことである。この個人的理由が本論の主要テーマであるが、それは死の問題であった。

「1940年3月21日の記事の中で、ニザンはモーリス・トレーズによって『ポリス』『ポリスの密告者』として取り扱われることになる。党書記は語る。『二日後(8月27日)に、党の報道機関を弾圧した公民権停止を言い繕うため、ブルジョワ紙との協力という<計画>を口実にして、<民族共産主義>なる考えを始めた。それは、言わばことばでの共産主義で、実際は民族主義である。』」⁽¹⁹⁾

こうして、レットルを貼られたニザンはイギリス軍の中で通訳として働く。だがニザンはドイツ軍との闘いの中で絶命する。ボエヴォワールは驚

き、悲しむ。

「私は気が転倒した。死をあんなにも嫌っていたニザンが。彼は死んでゆく自分を見つめていたのだろうか？」^④

註1. 東京図書, 1968, p.664

2. 1927年, フランス共産党に入党するまでダダイスム, シュルレアリスム運動に参加していた詩人, シュールと決別してからは党员作家として文学活動をする。レジスタンス運動の時に, Crève-Cœur, Les yeux d'Elsa など多数を発表。小説では, Les Beaux Quartiers (1936), La Semaine Sainte (1959) など多数を発表する。

3. パリでは正午過ぎに夕刊が発売されるが, 翌日付けになっている。

4. Louis Aragon <Les Communistes>, Le Livre de Poche, Tom 1, p.113

5. この時, ボーヴォワールはサルトルと共に, ヴァカンヌでマルセイユに居た。このニュースを知る前, コルシカへ居くニザンに港で偶然会っていた。彼らがニザンに会う最後であった。

ボーヴォワールはサルトルと共に実存主義作家であり, L'Invitée (1943), Le Deuxième Sexe (1949), Les Mandarins (1954) などがある。

6. Simone de Beauvoir <La Force de l'Age> Gallimard, 1960, p.387~388

7. 1920年からフランス共産党员となり, 下院議員を務め, 戦時中はソ連に滞在する。戦前戦後を通じてフランス共産党の重要人物であり, 1945年に国務大臣も務める。著書に「人民の子 Fils du Peuple, 1937)」がある。

8. ミュンヘン協定を指す。1938年9月30日英国(チェンバレン), フランス(ダラディエ), ドイツ(ヒットラー), イタリア(ムッソリーニ)の間で結ばれた。チェコスロバキア国内でのドイツ人の待遇をめぐる戦争の危機にさらされた。協定の内容が, チェコを泣き寝入りさせることで, ヒットラーに譲歩するものだった。この外交会議にソ連は参加させられなかった。つまり政治的差別である。ミュンヘン協定をコミュニストは帝国主義者のボス交渉と見なしたと言えよう。

コミンテルンについては第三章の註19を参照。

9. ミュンヘン協定が帝国主義者達の握手であるなら, ヒットラーとスターリンの握手が帝国主義者達の間を分断することを意味する。

10. <Communiqué de presse du groupe Parlemen-

taire communiste du 25 Aout 1939> dans <Les Communistes Français pendant la drôle de guerre> par A. Rossi, Les Iles d'Or, 1951, p.24, pl.1

11. La lettre de P. Nizan à sa femme, aux Armées, 21 Septembre 1939, dans <Paul Nizan intellectuel communiste, écrits et correspondance 1926—1940> présentation de J. J. Brochier, Maspero, Paris, 1967, p.255

12. エドゥアール, ダラディエ Edouard Daladier (1884—1970) 急進社会党员で, いくつかの大臣を歴任する。1938年4月から40年3月まで首相を務め, 1939年9月3日ドイツに宣戦布告をする。

13. 独ソ不可侵条約のこと。

14. スターリンのこと。

15. La lettre de Nizan à sa femme, aux armées, le 30 Septembre 1939, 註11の出典と同じ。(以下ことわりがない時, 手紙は全てこの本からによる。) p.257

16. Jacques Duclos (1896—), 1926年以来フランス共産党中央委員会に入り, 21年間下院議員の後に, 1959年に上院議員に当選。

17. S.de Beauvoir <La Force de l'Age> p.147

18. La lettre de Nizan à sa femme aux armées, le 22 Octobre 1939, p.261

19. A. Rossi <Les Communistes Français>, p40 モーリス・トレーズのこうした批難と断罪の論評については次の妻にあてたニザンの手紙で明らかである。

「あのいきさつは, スターリンが気に入らないとか, 独ソ協定や, フィンランドのことが我慢ならないとかを公けに知らせたぼくを容易に許しはしないんだと思っていたんだ。(Aux Armées, le 4.5 février 1940, p.272)」ニザンは Oeuvre 紙に脱党の理由を書いた手紙を載せる。

20. S.de Beauvoir <La Force de l'Age>

II

苦悩する若者, ニザンは余りに世界を冷やかに見ていた。その世界状況を垣間見ておくことが必要だろう。

第一次大戦がフランスの領土を戦場化⁽¹⁾せしめ, 近代科学による戦争⁽²⁾は, 戦時中に出現した反戦, 厭戦気分⁽³⁾を戦後に至ってロシア革命(1917年)を支持させるまでに至る⁽⁴⁾。その要因たるは, 戦後処理に起因する政財界の思惑, 戦後経済の混

乱⁶⁾、ソビエト政権成立の影響による不安⁶⁾、ヨーロッパ弱少民族の民族自決のスローガン⁷⁾などがある。このような時代背景をニザンは断言する。

「全ては諸々の病いをしめくくる無秩序に似ていた。」「始まりの始まりの混沌ではなかった。」⁸⁾

サルトルと共に学んだエコール・ノルマル、一流エリート養成校の姿をも同様に冷静な眼で、ニザンは見つめる。

「この施設は、ヒドラのようにいくつかの頭を備えたフランスの頭のひとつである。人々はそのこである高慢な魔術師の群の一部を育成し、この群を作るために金を払う人間達は、その彼らをエリートと名づける……高等中学校の数年間を通じて疲れ、古典学級や家庭のブルジョワ的な道徳や料理で堕落させられた青年達。」⁹⁾

これらの若者達が道を踏みはずすことがなければ、レジオン・ド・ヌール勲章や学士院が待っている。しかしニザンにはそのエリートの道は心地良いものではなかった。

「学業の偶然、慎重な助言がエコール・ノルマルと、未だ人々が哲学と呼ぶその筋の訓練へとぼくを連れていった。だがやがて双方共、すでに可能な限り全ての不快感をぼくに催させた。」¹⁰⁾

「……運命を責め、いつまでもピラト¹¹⁾のしぐさをする事で満足してはならない。」¹²⁾

生きるための手だてをエコール・ノルマルで探し求めることは不可能であった。たとえ探し当てても、当時のフランス社会の要請に答えるものでしかなく、不快感に満ちたニザンにとって、およそ我慢ならぬものであった。彼は自己の求めるべきものを探し続けた。ノイローゼ気味¹³⁾になってさえも、信仰の世界¹⁴⁾、右翼の戦列¹⁵⁾、旅行¹⁶⁾、あるいは左翼への接近¹⁷⁾などの動揺の中で、自己の精神的な支えを見出そうとした。この当時、文化的状況においてはさまざまな潮流が存在していた。キリスト教¹⁸⁾であり、シュールレアリスム¹⁹⁾や王制を唱える若者達²⁰⁾、ルネサンス以来のフランス精神の伝統的なユマニスム²¹⁾などを求める若者達が居た。最後の逃亡としての試み、「現実的な逃亡が残っていること、それが起こっていた。三面記事がいくつかの自殺を時々知らせている。」²²⁾そして実際にニザンが試みた旅行があった²³⁾。だ

が、ヨーロッパ内の旅行ではない。西洋を離れることであった。この苦悩する若者にとって、文明の地ヨーロッパは混沌の地であり、逃げ出さねばならぬ地であり、精神的に貧困な地であった。「知恵の英雄アジアと力の英雄アメリカの間において、苦悩する老婆」²⁴⁾に見えた。

エデン Eden という発音に似たアデン Aden へニザンは旅立った²⁵⁾。それまでに出会ったヨーロッパの精神は海の彼方に没した。もともと旅人には自由がある。日常生活のリズムに捉われない自由がある。そして、単なる旅行者には帰る地がある。彼には、再び始まる日常生活があるが、ニザンにはそれがない。たとえフィアンセがいたとしても、ニザンには求めるべきものに基づく日常生活はあり得なかった。日常生活を喪失した、単なる旅人ではないニザンにあるのは、自由だけである。だがそこから得るものはない。「もっと書いて欲しい、退屈している。おそろしく退屈している。旅は解決ではない」²⁶⁾と手紙を書くニザンは、選びとった旅さえ否定せざるを得ない。「先見の明ある旅人は最初の寄港地で旅の真実を理解してしまう。」²⁷⁾航海する舟乗りたちが、陸に住む家族や恋人を思うがごとく、ニザンの思考は棄てたはずの日常生活を意識し始めた。それがために倦怠感にとらわれる。旅は、彼にとって無意味たる存在に帰結する。

砂漠の隅に、海に面したアラブの世界の一部を占めるアデンの地には、そこに住む人間の生活があった。大英帝国の支配するアデンでのヨーロッパ人の生活は、あくまでも祖国の日常生活の延長であり、このアデンの町はアフリカやアジアへの補給基地、前進基地であり、港にはイギリス海軍の輸送船や艦隊があった²⁸⁾。それらは、とりもなおさず世界を支配せんとするヨーロッパ人の野望のもたらした風景である。言わばヨーロッパの本質である。ニザンはアデン・アラビアの中で次のように述べている。

「アデンは、われわれの母なるヨーロッパの甚しく濃縮されたひとつの映像であった。それはヨーロッパの圧縮されたものであった。長さ5マイル、幅3マイルの徒刑場のように縮められた空間に収容された数百人のヨーロッパ人は、東洋の地により大はばな縮尺の元に、祖国での

生活形態との類似点が構成する図形を、驚くべき正確さで再現していた。東方は西方を再現し、注釈している。』⁹⁹

日常生活が、逃亡や旅、つまり拘束なき解放、自由に対置されるものとして考えていたとは言え、今や旅の果てに期待していたものは、このようなアデンの地であった。かってニザンがパリで見た水兵募集や海外での仕事紹介が、植民地主義を押し進めるためのものであったと理解する¹⁰⁰。この地にあるヨーロッパ人の生活は「全ての装飾は忘れられ¹⁰¹」ていた。祭りや音楽、劇場、出版社などおよそ文化的なものはなく、たとえ出版物などが本国から送られても、ほこりを被っているだけであった¹⁰²。ただ人々の生活のありのままの姿に他ならない。ニザンの言う「極端な粹純状態、つまり経済的状态に環元された人々の生活¹⁰³」である。

アデンの地での日常生活は、ヨーロッパのそれと変りなく、つまり本質を示すものであったが故に、経済のためにのみの生活であることが明確になった。だからこそ、ニザンは「人間であるためには余暇が必要である¹⁰⁴」と断言する。小説「アントワヌ・ブロワイエ Antoine Bloyé, 1933, Grasset) の中で、ポール・ニザンは夢を見始めた主人公アントワヌの内面生活が始まったようすを描き出し、魂を持たせる。眠り、つまり夢の中でのみ自己の回復をする人間がまさしく、この「経済状態に環元された人々の生活」を営んでいるのだった。このような自己回復は、死んでいることに変りはない。眠りが死者のごとく、目覚めた意識が失われている状態であるがために。しかるに外的生活が自在に動いている社会と言う機械に組み込まれている限り、それは奪われている。余暇が必要なのは、目覚めている意識状態において夢の代りとなり得るからである。自己回復のために余暇が必要である。

ならば、この地に住むアラブ人を中心とした人間はどうか。本来生物である人間を異邦人と同格者たらしめる砂漠地帯のここでは、人間はありのままを丸ごと受け入れねばならない。「砂漠地帯では、生活に役立つ生成に組しない単純な関係のみを人間は保っている¹⁰⁵。」人間は自然の中の一部であり、一員であって、自然と対等な関係な

ど持ち得ない。「この無力さの上で、宿命の中に信仰が根拠を置く¹⁰⁶」状態に彼らがあるに過ぎない。ニザンには倦怠に充ちた生活に見える。自然の中に埋没している姿は、徒らに「死」を待つだけである。宿命として。このアデンの地で、ニザンが知り得たこと、それは、アラブ人も含めて自己回復をしていない人間が余りに多いことであった。とりわけヨーロッパ人の生活が、純粋な経済状態でのものであったために、ニザンには我慢ならなかった。今や、ニザンは別な日常生活を求めなければならない。

註1. ベルギーのイープル、フランスのアラース、アミヤン、ロトンド、ランス、ヴェルダン、ナンシー、パールをほぼ結ぶ線が英仏連合軍とドイツ軍の戦闘の前線であった。

2. 1915年4月25日、ベルギーでのドイツ軍による毒ガスの初使用。1916年9月、英軍の戦車、航空機による戦闘、初めての空襲などが挙げられる。

3. 神聖連合の体制、つまり挙国一致体制がとられていたとは言え、社会党員やサンディカリスト達によるストライキ参加者は1915年に1万人、翌年には4万人、1917年には30万人にもなった。1916年12月の社会党大会で反戦派は、1915年以来のレーニンやトロツキーらの第三インター参加の投票に1537対1407で敗れたが、1918年社会党全国委員会では、戦争賛成派の1172票に対して1696票を獲得した。

文学作品では、アンリ・バルビュス Henri Barbusse (1873~1935) の〈Le Feu (1916)〉、ロマン・ロラン Romain Rolland (1866~1944) の〈Au dessus de la mêlée (1915)〉を挙げることができる。この二人は戦後、ロシアの十月革命を支持し、反ファシズム闘争にも参加する。

4. 上記註3の戦争反対派は1920年2月ストラスブールの17回大会で、第二インター脱退を決め、同年12月ツールの18回大会で、第三インター加盟を決める。そのため社会党は分裂し、戦争反対派は多数派となり、フランス共産党（正確には共産主義インター・フランス支部）が生れる。

5. 1919年、パリ平和会議でヴェルサイユ条約の締結。ドイツは $\frac{1}{6}$ の領土を分割され、国外の植民地などの権益を全て失う。また軍備の制限、空軍と潜水艦保持の禁止、その上英仏連合軍国に対する莫大な賠償金が課せられた。この賠償金は、フランスにとって、荒廃した国土の復興、戦時中のアメ

リカに対する債務などにあてられることになった。しかし円滑に行われず、1923年ドイツの重要工業地帯ルールへの出兵となり、これがフランス国内にインフレを引き起こし、さらには、出兵のための増税さえ行われた。

6. 先ず、戦時中のロシア革命に対する干渉戦争であるが、1918年夏から始まる。英仏米の黒海、トルコ、北極海からの進軍。ヴェルサイユ条約による東欧諸国の独立とそれへの援助はドイツを包囲する策でもあり、革命の輸出に対する防疫線でもあった。そしてパリ会議では、フランスのドイツ弱体化政策がイギリス・アメリカによって反対されたが、ドイツの賠償金問題にからんで、アメリカ資本のドイツへの投下はドイツ資本主義を安定させることになり、革命の輸出の防波堤でもあった。
7. チェコスロヴァキアではフオマス・マサリック Fomas Masaryk (1850~1937) の指導の元に独立する(1918年10月18日)。第一次大戦の直接のきっかけとなったオーストリア皇太子暗殺事件のおきたユーゴスラビアではセルビア人を中心とした民族の独立宣言(1918年12月1日)がヴェルサイユ条約で認められた。ドイツ、オーストリー、ロシアに三分されていたポーランドは、国外での独立運動が効果的に進められたがブレスト・リトウソフ条約(1918年3月3日)で解放され、ウィルソンの14ヶ条によって独立を認められた(1918年10月5日)。
8. A.-A., p.55
9. A.-A., p.57
10. A.-A., p.56
11. ポンティウス・ピラテュス(紀元一世紀)イエスを裁判する時のローマ帝国の行政長官で、無罪を認めたが、民衆の強迫に屈し、死刑を宣告した。
12. A.-A., p.61
13. 少年時代の女友だちエレーヴ・フォヴェル Héléve Fauvel は、ニザンがノイローゼ気味になり、スイスへ療養に行くかもしれないという手紙を受け取っている。cf. Jacqueline Leiner <Le destin littéraire de Paul Nizan> Paris, Editions Klincksieck, 1970, p.40
14. プロテスタントに改宗しようとしたが、ニザンは母親に反対されたことをサルトルはアデン・アラビアの序文で回想している。また、エレーヴの父の死に際して、彼女宛ての手紙の中で信仰を持

って勇気を持たせようとしている。(Jacqueline Leiner <Un Portrait Pirandellien> dans Atoll. No1, 1968, p.33) またニザンのいところ、ムッセ神父 L'abbé Moussé の証言によれば、ル・マンに近いソレスムの町にある修道院を訪れたことがある(前記 Atoll 誌 p.20)。この地には1010年頃ベネディクト会の修道院が造られ、1790年に廃止、1833年に再開されるが、1901年に再び閉じられる。1922年に再建された。サン・テクジュペリ、シモーヌ・ヴェイユ、ポール・クロデル、シャルル、モーロワ、ポール・ヴァレリーなどの文学者が訪れている。

15. フランスの伝統とナショナリズムを賛えたモーリス・バレス(1862~1923)を賛美した雑誌 Fruit Verts, 主宰はジェラルド・ド・カタローニュでニザンは創始者の一人であるが、2号で廃刊となる。雑誌 Faisceaux のグループと雑誌 Argonantes のグループが合併し、ジイドやジロドゥー、ジュール・ロマンらを尊敬して出版された。またニザンはジョルジュ・ヴァロワの引き入るファシスト団体にも加盟した。この団体はイタリアのムッソリーニを模倣していた。ニザンは1号に短編ヴァカンス、2号(1924年6月号)に詩編メトッドとエッセイ「マルセル・プルースト」を載せる。
16. 1925年10月頃、イタリア(ピサ、フィレンツェ、ローマ)に旅している。
17. アデンに出発する前にフランス共産党に入党していると言われているが定かではない。いずれにしろ左翼への接近は明白である。1925年初め、ジョルジュ・フリードマンが主宰していたエコール・ノルマル国際情報グループに接近し、ここの講師の一人 J.-R. ブロック(1884-1947, 革命文学に貢献、小説、芝居、エッセイがあり、第二次大戦中、モスクワからレジスタンスの行動を賛える放送をした。)に2月知りあう。フリードマンを通じて、哲学同人誌 Philosophies (フリードマン、アンリ・ルフェーヴル、ジョルジュ・ポリツェル、ピエール・モランジュらが同人)のグループに接し、親交を結んだ。共産党への接近については第三章註11で述べる。
18. 宗教的な色彩を帯びた作家達には、ポール・クロデル(1868-1954)は戦前からであるが、アンリ・ゲオン(1875-1944)、マリー・ノエル(1833-1967)、シャルル・デュ・ボス(1882-1939)、フランソワ・モーリヤック(1885-1970)、ジョ

- ルジュ・ベルナノス (1888—1948) らがいる。
19. シュールレアリスムの影響はニザンにあった (小説アントワーヌ・ブロワイエの第19章を参照)。この運動は、アンドレ・ブルトン (1896—1966) が中心となって、絵画文学などの諸芸術に、深層心理や交霊術などを用いて創作活動をする。ニザンはロマンティズムと評した (A.—A., p.67)。第三章の註11を参照。
 20. シャルル・モーラス (1868—1952) のアクション・フランセーズが王制を唱えていた。若者達はこれに強い反応を示していた。
 21. P.H. Simon の言うユマニスト的文学を指すと思われる。ジャック・リヴィエール (1885—1925), アンドレ・モーロワらが居る。
 22. ニザンはアデンで自殺を試みたことがある。またシュールレアリスト革命誌の2号では自殺の特集で、作家、画家達に自殺に関するアンケートを載せている。
 23. ピエール・マッコランやヴァレリー・ラルボー (1881—1956) らが、冒険小説、旅行小説を書いている。
 24. A.—A., p. 69
 25. 出発は1926年10月20日頃でイギリスの西海岸スワンシーから、エル・アミン号に乗る。アデンを選んだ動機は分らぬが、ベルギーの新聞に掲載された広告で、アデンでの家庭教師募集を知った。雇い主はフランス系と思われるイギリス人の貿易商A・ベッスであった。5月頃、ブロックに相談し、9月にイギリスから決意の手紙をブロックに出している。帰国したのは1927年5月。
 26. La lettre de Nizan à H. Alphen, Djibouti, janvier, 1927 (前章註11の本p.92). H. Alphen は後の妻。
 27. A.—A., p.90
 28. 1925年、中国で始まったストライキが広東地方をおおい、英・米など列強の租界地が国民革命軍におびやかされるのを知って送られた軍備か？
 29. A.—A., p.108
 30. A.—A., p.73
 31. A.—A., p.111
 32. ibid.
 33. ibid.
 34. A.—A., p.110
 35. A.—A., p.141
 36. A.—A., p.141

III

本論の冒頭で「ぼくは20歳だった……」とニザンが言ったことば、またサルトルの証言は、この敏感な若者が、死の恐迫観念にとらえられていたことに他ならない。

人間はアントワーヌ・ブロワイエの娘 マリーと同様に生命を抱いた時から死を身ごもっている。⁽¹⁾ このことを知った時に、その懐任の苦しみが始まる。サルトルは印象深くニザンを語る。「ニザンは最も取りつかれていた。時々目覚めているのに、自らを死骸と見なしたり、眼が蛆でうようよしていると言って、円い日除けのついたボルサリーノを手さぐりして、握み、姿を消した⁽²⁾。」小説アントワーヌ・ブロワイエはニザンの父をモデルにしたものである。その小説の中で突然、アントワーヌは死の恐迫観念に襲われる。

「すると突然、アントワーヌは自分が死なねばならないと感じた。男や女たちが日常の動き、思いにふけて通り過ぎるトルビク街の歩道の上で。永遠の生命に向って、静かに前進する通行人たちから、彼は一挙に隔てられた。認識の唯一の動き、特別な、そして完全な知力で彼はこのものを知った。」⁽³⁾

アントワーヌは暗いセーヌの河辺を、死におのいてさまよう。「この毎夜の遁走は、小説家のつくりごとではない。ニザンは彼の父のことについて私に語り、私は全て真実であると知っている⁽⁴⁾。」とサルトルは語る。ニザンも同様に「父親の暗い錯乱を繰り返した⁽⁵⁾。」死の懐任を意識し、その苦しみが持続する限り、産み出すまで続く。「上訴なき有罪宣告、命令的な判決、『君たちはやがて死ぬのだ』⁽⁶⁾」と判決を下された者は、アントワーヌのごとく死の床に横たわる姿を客観視することが可能である。同時に彼の目前の世界は、死を前にしては無意味たる存在になってしまう。それはニザンに関わりなく、自律運動の展開を繰り返す。

ポール・ニザン自身がエコール・ノルマルで学ぶ哲学や精神世界の領域で、死の恐迫観念を払拭することができたか？無駄なことだった。精神の高みで、内面の充足を得ていたとは言え、それを支える肉体は外在の時の流れの中にある。まして意識された死を知性によって取り扱ってもどうに

もならぬ。肉体の喪失によって死が訪れることは、知性によって理解される。知性は非情なるものだ。知性は、死からまぬがれ得ぬものとして理解せしめ、諦観を人間に吹き込む。宿命に従わざるを得ない。ニザンには我慢ならぬことであった。それは、ヨーロッパ精神の拒否、ヨーロッパそのものの拒否、アデンへの旅立ちをもたらした。だが先に述べたように「もはや、残るのは、続けること、新しいやり方で死について考えることしかない⁽⁷⁾。」アデンでの人間の社会の本質たるものを知ることは、今や別な意味での日常生活を手に入れることを促した。孤高にあり、苦悩していたニザンは、人間の中へ新たな思いで歩みを始める。宿命の中や不条理の中での生を得るためではなく、またそれらの中で死ぬのではなく、自己回復を得、生を、人間社会を丸ごと受け取め、人間らしさを取り戻す生を得るために。

パリに戻ったニザンの眼には、アデンの姿がそのまま重なった。そこに住む人間たちをホモ・エコノミクス⁽⁸⁾と見なした。彼らの支配する社会は、人間の自己回復をし得る手だてを奪い、ホモ・エコノミクスのなすがままの状態であった。

「彼ら（ブルジョワジー）の空虚さが、虚無ではなく、生活を愛する人々の不幸を引き起こしている。ぼくが恐れるのは当然のことだった。夢にふけ、しかも無知以外何ものでもないこの敵は恐ろしいものである。ぼくは、彼らの本来の生活と、人々に向かわせんとするその生活を同時に恐れていた。」⁽⁹⁾

ニザンは死の恐迫観念を意識していたが故に、かつては天空の彼方にあった敵を自己の視界に定めた。

「種々の力と観念の抽象的な犬畜生こそが、奴隷状態と、そしてそれがぼくに抱かせる混乱した恐怖の真の原因である。皮と骨と打算でできたマネキン人形を破壊し、皮を剥ぐことを、時がぼくを急きたてる。その人形を以前には不敵な悪魔と見なしていた。今や不安の諸々の原因に対して闘いをする時である。手を汚す時である。いつでも兄弟を持つ時があるだろう……ぼくが闘うならば不安は消え失せる。」⁽¹⁰⁾

ポール・ニザンのフランス共産党入党は、死の恐迫観念を克服するという極めて個人的な内面世

界の高まりからであると言えよう。同時に死を意識した眼が世界を冷静に疑視でき、彼なりに本質を捉えることができ、反権力の姿勢を取るためにユニスムを手だてとした⁽¹¹⁾。アデンからの帰国後、一年半、1928年に雑誌、新文学(Les Nouvelles Littéraires, 12月8日号)⁽¹²⁾のインタビューを受け、その決意を語っている。

「戦争の存在で飾られた年月⁽¹³⁾は、私たちにとって、ちょうどとてつもない長いヴァカンスでした。そこでの死、子供に許された自由、年上の人達の暴力的な遊びは、不可解な糧を供給したのです。破局と悲嘆と大人たちの疑装の間で、この無秩序は、そこに居ると自覚している子供と同じものでした。……私たちが生きている政治的、社会的、道徳的な制度を、秩序を通じて理解し、資本主義体制によって生み出された価値の恒久不変を秩序として見なすなら、私はできる限りのあらゆる暴力を持って、この秩序を排斥します。……私が理解していることは、人間の秩序、人間に於ける人間の真の関係とそれぞれの人間の力に於いての実現です。私たちはヒューマニズムについて再び語りましょう。それは革命の翌日です。」⁽¹⁴⁾

帰国後のニザンの活動の舞台は文化的分野であるが「マルクス主義」「ビフェール」「ユーロップ」「世界」⁽¹⁵⁾に協力、あるいは参加し、これら一連の左翼雑誌への執筆は1939年脱党まで続く。フランス共産党の機関紙「ユマニテ」の書評欄、共産党系の夕刊紙「ス・スワール」紙の書評欄を担当する⁽¹⁶⁾。またリヨン近くの田舎町の高等中学校の哲学教師をしながら、1932年5月の総選挙に共産党から立候補し、落選した⁽¹⁷⁾。10月パリに出てユマニテの仕事に着き、翌年、革命的作家美術家連盟に加盟し、その機関誌「コンミュン」の編集部にアラゴンと共に入る⁽¹⁸⁾。1934年、コミンテルンの招きでモスクワへ妻と共に行き、一年間滞在し、マルクス＝エンゲルス協会、革命的国際作家連盟、国際文学、モスクワ新聞で働く⁽¹⁹⁾。第一回ソヴィエト作家会議にも参加した⁽²⁰⁾。人民戦線の路線が功を奏している時に、帰国し、フランス各地で講演し、文化の家⁽²¹⁾で活動する。1935年6月の「文化擁護国際作家会議」の発起人のひとりとなり、発言をした⁽²²⁾。

言うまでもなく、これらの活動の基調は、あくまでも階級意識を持ち、プロレタリアの戦列に身を置いての姿勢である。「全ての文学は宣伝である」¹⁰と規定するニザンの小説は、少くとも単なるアジテーションでもなければ、コミニズムや共産党を賛えるものでもない。

註1. Paul Nizan<Antoine Bloyé>Paris, Grasset, 1933. 同書の P. 253にマリーの死が描かれている。以下A.B. と略す。

2. J.-P. Sartre <Les Mots> Paris, Gallimard, 1964, p. 163

3. A.B., p. 271

4. Sartre<Avant-propos>d'Aden Arabie, p. 32

5. ibido. p. 34

6. A.—A., p. 56

7. A.—A., p. 128

8. A.—A., p. 150, ニザンは種々の人間の内部に Homo Economicus を認めている。それらの人間の全ては共通して、金を中心にものを考え、唯一の基準価値にしていると言えよう。これらの人間の総称であり、本質でもある。

9. A.—A., p. 154~155

10. A.—A., p. 155

11. 前章註17の続きとして。ポール・ニザンが Philosophies の一員として参加したのは、モロッコ戦争に反対して、クラルテ・グループとシュールレアリストのグループが接近し始めていた頃である。クラルテ・グループはアンリ・バルビュス(1873—1935)を中心として、十月革命を支持した知識人たちのグループ(R.ルフェーブル, ジュール・ロマン, A.フランス, R.ロラン, G.デュアメルが居る)で、1921年雑誌クラルテ(週刊)が創刊された。バルビュスの脱退, A.フランスの死後, この雑誌は振わず, モロッコ戦争で, このグループは哲学, シュールレアリストらと宣言する。「先ず, そして常に革命を Révolution d'abord et toujours」と宣言した。

シュールレアリストのグループは, アンドレ・ブルトンを中心とし, ルイ・アラゴン, ポール・エリュアールらが居る。理性的な意識機能を破壊して, 意識の深みにおりていこうとするもので, 若い世代に影響を与えた。精神面の革命は社会的な革命なしに実現はできないとする方向へ行き, この宣言に同意した。

哲学グループは, 古典的哲学を退け, 新しい哲

学流派をつくるとした。同人誌は1923年3月創刊。この宣言(ニザンは署名をしない)が発表されたため, 同人のひとりの父銀行家が援助金を打ち切ったため廃刊となる。この当時, 弁証法的唯物論が知られていないために, 革命的方向に向いていた。

1926年5月1日にエスプリ誌を創刊するが翌年2月第二号で廃刊となる。「彼らは, 労働とか要求の元に人生を考えず, 空想的な価値を人生から作っていた(ボーヴォワール, <娘時代>)。」この頃(1926年2月)に共産党に加盟したが, 決定的と成り得ず, アデンからの帰国後1927年の終りか, 翌年の始めに入党した。いずれにしろ, コミニズムに接近したのはモロッコ戦争がきっかけと言えよう。エスプリのグループはニザン入党後に続き, ブルトンらシュールレアリストも引き続き入党した。

12. ジェラルド・ド・カタローニュのインタビューに答えたもので, レポーターは冒頭に次のように記した。「私はニザンが, 社会主義者であったり, ファシストであったこと知っていた。彼は, 今ではコミニストである。」

13. 第一次大戦を示す。

14. Les Nouvelles Littéraire—8 décembre 1928, p.5

15. マルクス主義 La Revue Marxiste一月刊誌, 1929年2月創刊, 同年12月7号で廃刊。エスプリのグループ入党後, シャルル・ラポール(共産党創立以来の黨員で中央委員)が主幹。創刊号でニザンは, 資本主義に関する合理化論を載せ, 2号では, 書評を書いている。

ビフュール Bifur 一月刊誌, 1930年12月に創刊, 翌年6月8号で廃刊。カルフル出版社の社長(ピエール・G・レヴィ)がスポンサー, 編集長にはジョルジュ・リブマン=デセーニュで, シュールレアリスムの影響を受けたアナキスト的色彩の強い雑誌。事務所は, ブロックやエルンスト, ピカソらに提供された画廊でもあった。5号が印刷中(3月頃)にニザンが参加, その影響で政治的色彩が強くなる。7・8号に<番犬たち Les Chiens de garde>の下書きと言える「哲学に関するノート」が連載される。またサルトルも「真実の伝説」の抜萃が載る(ボーヴォワール「女ざかり」)。

ユーロップ Europe 一月刊誌, 1923年に創刊, ロマン・ロランの出金でアルベール・クレミュー

が創始者。ニザンは1930年7月号に書評を初めて掲載。

世界 Monde 一週刊, 1928年6月9日付けで創刊され, 1935年10月10日付けで廃刊。創始者, 編集長はアンリ・バルビュスで, 1927年, 国際革命的作家連盟の依頼で, フランスでのプロレタリア文学の普及を目的とした。1931年3月の145号にニザンは初めて寄稿する。

16. ユマニテ L'Humanité—日刊紙, 1904年, ジャン・ジョーレスによって社会党機関紙として創刊されたが, 1920年12月フランス共産党誕生の時マルセル・マルティネの編集の元に共産党の機関紙となり現在に至っている。

ス・スワール Ce Soir—1937年3月2日に第一号, 編集長にはアラゴンと J.-R. ブロック, ニザンは事務局長として, 国外記事と書評欄を担当, この職務の体験を通じて後に〈9月のクロニクル Chronique de Septembre, 1939〉を発表する。

17. この年の総選挙では, 共産党の得票は前回(1928年)より後退し(30万票減の77万票), 逆に社会党が約25万票増やす。この選挙が, 人民戦線への戦術転換の一要因となる。

18. コミューン Commune—月刊誌, 1930年ソ連のハルコフで開かれた革命的国際作家連盟に出席したバルビュス, クウルチエらによって創設された革命的作家美術家連盟(1932年12月)の機関誌で, 1933年6月に発刊される。ニザンは1933年1月以来, この連盟に参加し, 編集委員会にはバルビュス, ジイドらが居て, 編集部にはアラゴンと共に任務につく。

19. コミンテルンKominternはロシア語 Kommunistitchski International(国際共産主義)の略で, レーニンの指導する第三インター(1921)を示す。

マルクス＝エンゲルス協会は不明

革命的国際作家連盟(U.I.E.R.)は上記註18参照。

国際文学—1933年の初めに「世界革命文学(U.I.E.R.のハルコフ会議の外国向け出版物)」の代りとして出版されていたが U.I.E.R. の機関誌とも言える。モスクワで, ロシア語, 英語, 仏語, 独語に印刷され, ほぼ毎月, 日付けなしで出版され, フランスでは1939年まで発売されていた。編集には, アニシモフ, ドナモフ, バルビュス, ゴーリキー, ドス・パソス, ロランなどが名を連ねている。ニザンは2・3号にソヴィエト文学に関

する論評を載せている。

モスクワ新聞は不明。

20. フランスからの参加者にはA.マルロー, J.-R. ブロック, アラゴン, ウラジミール・ポズナが出席。ロマン・ロラン, ジイド, バルビュスらも招待されていたが欠席した。

21. 1935年3月, 革命的作家美術家連盟の本部として開設され, 文学だけでなく, 芸術活動の全分野に及び, その中心的存在となった。人民戦線運動の成果の一つである。

22. 文化の家運動の国際的規模と言える。アラゴン, アラゴン, バルビュス, ジイド, マルロー, ロマン・ロラン, ニザンら24名のフランスの文学者の署名入りの呼びかけと招待状が各国の思想家, 文学者に発送された。ファシスト抬頭に際して擁護すべき文化, その手段を検討, 審議しようとするものだった。28ヶ国230名の参加があった。大会決議には, 国際文化擁護作家連盟の組織, 反ファシズム, 反帝国主義を採用, 会員の相互交流, 国際文学賞の設定をした。ジイド, アラゴン, マルロー, ニザン, バルビュス, プレヒト(独), フォスター(英), ハックスレー(英), ルッポル(ソ連), ミハエリス(デンマーク)など50名以上が, 5日間にわたって発言した。

23. <Littérature Révolutionnaire en France> dans La Revue des Vivants, Septembre-Octobre, 1932, ibid. P.Nizan <Pour une nouvelle culture> Grasset, 1971, p.34.

IV

「アントワーヌ・ブロワイエ(1933)」, 「トロイの木馬 Le cheval de Troie(1935)」, 「陰謀 La Conspiration (1938)」だけがニザンの小説であるが, いずれも, 資本主義体制下での人間を描き, ニザンにとって重要な死のテーマが随処に現われている。「アントワーヌ・ブロワイエ」では貧困家庭出身の鉄道員が, ニザンの言う人間らしい生を奪われ, 死の恐迫観念にとらわれた姿を描いている。「トロイの木馬」では, デモ隊が右翼や警官との衝突するまでの高まりを中心として, 共産党員たちの種々の思いと行動を描き出し, 宿命に左右される人間や生命をかけて行動する人間を描いている。「陰謀」では, 思考錯誤をしながら, 多感な若者たちの反抗が, 彼らを取り巻く社会環境の中で言わゆる青春の誤ちとして描かれ, ニザ

ンの「我慢ならぬ大人への成長」を描いている。

とりわけ注目して良いのは「トロイの木馬」である。地方党员達が描かれていても、英雄的主人公は存在せず、その地方にどっぷり浸っている存在であった。彼らが唯一の希望を持っているとは言え、図式的に革命に向う人間として描かれてはいない。余りにも印象的なのは、自転車に乗って墮胎医を探しに行く党员の姿である。作者は二つの死を対比する。墮胎したがためにベッドで、人知れず出血多量で死ぬ女の死、そしてデモ隊の中で殺された同志の死である。前者は許すことのできぬ死、言わば宿命的な犬死であって意味を持ち得ぬ死である。それにひきかえ、後者は党员たちにとって許せぬとは言え、意味を持たせ得る死であった。

「我々が生れるのに手を貸さねばならぬ世界のために、彼は死んだのだ。それに彼はそれを知っていたのさ」⁽¹⁾

死を絶えず意識しているニザンには納得し得る死であった。革命を志さず人間達の間であって、人間らしさを取り戻しながら一種の連帯感の中に生きていく中で、取戻す闘いの中で、つまり孤独の中に閉じ込まれていない状態で、めぐり会った死である。

「各人が孤独と戦争の餌食であるこの世界に於いて、共同の価値の肯定は、共通の闘いを導く人々の間にのみ可能である。この人々は、愛より以上に広い友情をすでに創ることができる。彼らの兄弟愛はやがて来る全体性の野心そのものために、正当化される。」⁽²⁾

同志と共にあって、コミュニストとしての革命行動の中で得た生と死は、確実なものとして彼の手中に反応してくるものだった。「ぼくらは肉体しか持っていない。選ぶことが数多くあるわけではない。苦悩の類いしかない生活を送るか、生活を奪い取るために死の危険を冒すかだ。人間であることをもう恥ないために、この犠牲を敢行せねばならないのだ」⁽³⁾ この変貌はアデンへの旅以前には予想もつかぬものである。ニザンの行動は、ブルジョワ社会の与える不安、つまり言語や愛、死、生命が奪われていることを見定め、それらを奪い返す行動、共産党の目標と一致する革命的行動に他ならない。それが、生きることの不安を克

服する手段となり、死の恐迫観念を克服し、払拭するためのものであった。1960年版「アデン・アラビア」の序文でサルトルは強調する。

「ブルジョワの息子達には、模範的な反抗だと私は言いたい。何故なら、この反抗は直接的な原因としての飢えも搾取も持っていないから。ニザンは死の冷いガラス越しに全ての生を見たのだ。」⁽⁴⁾

1933年「アトワヌ・ブロワイエ」を発表した時点では、創造的な生を生きること、党活動に信頼を置いていた。1934年ソ連への旅立ちを前にしてのニザンをサルトルは語る。

「出発する時、彼は希望を私に話した。向うではおそらく人々は不死であろう。階級廃止は全ての溝を埋めているだろう。長期にわたる革命という仕事で結ばれている労働者達は死を通じて別な労働者に、その労働者がさらに別な労働者に変っているだろう。世代が次々に交代するだろう。常に別な世代であるが同一のものとして、と。」⁽⁵⁾

帰国後、ニザンはサルトルに語る。「現実には全て望むべきことを凌駕した。一点を除いて。つまり革命は生の恐怖から人間を解放したが、死のそれを取り除いてはいなかった」⁽⁶⁾と。そしてソ連の同志達は「死について考えていた。共通の仕事に対する情熱は、彼らを個人的で晦渋な天災から救いはしなかった」⁽⁷⁾と。ニザンから見れば一種の裏切りである。ポーヴォワールはそれを語ったニザンの姿を描き出す。

「フランスと同じく、向うの地でも人々が孤独で死に、それを知っていたということの発見は彼にショックを与えていた。」⁽⁸⁾

1935年秋に刊行した「トロイの木馬」の中で党员達の会話に次のような部分がある。

「マイヤールは言った。『もはや人間同志が闘わなくなる時、それでも運命と呼ぶやつと闘う時だろう』『今はそうじゃない。征服すべき別の敵が居るんだ……』とルイが言った……」⁽⁹⁾

ここに出て来る運命(destin)と言うことばは、死と死のもたらすものの同義語として扱って良いだろう。作者ニザンはこの会話の部分で、革命のための行動の中にさえも、死の強迫観念を克服し得ないことを確信し、暗に表現している。手だて

として採用した Kommunismus は彼にとって、自己の行動の根源の問題を解決するには至らなかった。同志の間にある連帯感、もはや何ものをも、もたらさずはしない。革命のための闘いの生を生きていたのであり、不安を与える征服すべき敵を根絶するために行動していたのに関わらず、裏目に出た。「彼（ニザン）は、自己の生を救うために闘っていた。そして党はその生を彼から盗んだ。彼は死に対抗していた。そして死は党を通じて、彼のところへ来た」¹¹とサルトルが説明することは、第一章に明らかにしたように、スターリンを中心とした社会主義国や Kommunismus の政策や動き、そして党のニザンに対する批難である。「あのいきさつは余りに運命で満ちている」¹²と書く時、運命に左右されることを我慢ならぬとするニザンの心中を理解できよう。党を含めた革命行動、反体制運動をつくり、支えている個人の手から離脱し、自在に動き出した組織は逆に個人を抹殺することさえ可能となってしまった。それを許せぬニザンは「スターリンの賭け」と指摘したのであり、スターリンに追随したフランス共産党の指導者を批判したのである¹³。

ニザンの手中にあるのは、「ことば」だけである。脱党後、書くことを止めようとしなかった。¹⁴「ことば」を武器として考えていたと言えるが、「ことば」の中に死の克服、不死の思いを求めたと断言はできない。仮に「ことば」を重要視していたなら、このような廻り道をせず、さらに多くの小説を発表していたであろう。ここで断言できるのは、革命を達成し、社会主義、共産主義を維持する者達が人間の顔を持たず、党組織が「人間らしさ」を保障しない限り、ニザンの反抗、「番犬たち（1932）」で示した過激主義は持続していたであろうということである。

「ぼくは20歳だった。それが人生で最も美しい時代とは誰にも言わせない。」このことばはニザンの原点を示したものであるが、これを書いた時点では、革命をめざす者が否定すべきもの全てが含まれていた。だがここに至って、個人を疎外する党組織も含まれてしまう。疎外は反抗を生み出す。その反抗は、自己を取り戻すことに他ならない。死は人間を、その存在を消滅させてしまうが故に、人間を不安に落とす。自我意識の喪失

であるから。ニザンは革命行動の中で、自己の生を求め、確かめた。自己の存在価値ありとした。先に見てきたニザンの革命のための行動がそれを示している。自己が生きているという存在証明を、意識されずとも、常に人間は求めている。存在価値ありとみなさない限り、自己の生を生きることはできない。ポール・ニザンの手中に残された「ことば」は、革命のための行動の中で獲得した「ことば」は、結果としてみれば存在証明を示すための手段である。1960年代に入って、サルトルを中心としてニザンの復権が企てられたのは¹⁵、単に Kommunismus を批判するだけのものではなまなく、ニザンの武器が振りかざされたのである。た、サルトルの左翼的行動を見るのなら、実存主義にあるアンガージュマン engagement の行為の延長線上にあると言えよう。

- 註1. Paul Nizan <Le cheval de Troie> Paris, Gallimard, 1935, p.206—207.
2. <Sur l'humanisme> dans Europe, 1935, Pour une nouvelle culture, Grasset, 1971, p.171
3. <Le cheval de Troie> Gallimard, 1935.
4. Avant-Propos d' Aden Arabie, p.36
5. ibid. p.45
6. ibid.
7. ibid.
8. S. de Beauvoir <La Force de l'age> p.213
9. Le cheval de Troie, p.207
10. Avant-Propos d'Aden Arabie, p.49
11. 本論文第一章の註19.
12. 本論文第一章の註18の手紙
13. 妻アンリエットに宛てた手紙（10月15日付）によると、ヴァカンスで過したコルシカ滞在以来、書き続けていた「陰謀」の続編「ソモジエラの夕べ La Soirée à Somosierra」の第一部、「九月の恋」が一応完成し、雑誌 N. R. F. に予告していた。（この原稿は、ニザンが戦死した時に戦友と一緒に埋葬してしまった。）また、この二ヶ月間の体験を基にして、「9月のクロニクル第二部」を書くことを表明。さらに、「陰謀」の第三部で主人公の第二次大戦下での行動を書くことを望み、資料の収集を妻に依頼している。いずれも未完に終わり、発表に至らなかった。
14. 再版されたものは、ガリマール社からは、「陰謀（1968）」、「トロイの木馬（1969）」、マスペロ

社からは「アデン・アラビア (1960)」、
「番犬たち (1960)」、
「古代唯物論者 (1965)」、
グラッセ社から「アントワーヌ・ブロワイエ (1960)」が
あり、ニザンの手紙や雑誌に掲載されたいくつか
の書評がマスペロ社から (1967)、
グラッセ社からは「新しい文化のために」と題して、ニザンの

書評や講演が収録され、出版されている (1971)。
ニザン研究書として、アリエル・ガンスブルグが
ユニヴェルシテール出版から (1966)、
ジャクリヌ・レイナーがクランクスイエック社から出版し
ている (1970)。